

筑波大学で学んだこと

亀田千里

東京家政学院筑波女子大学国際学部講師

1993年 筑波大学第二学群日本語・日本文化学類卒業

2001年 筑波大学大学院博士課程文芸・言語研究科言語学専攻単位取得退学

私は学類時代と大学院時代を合わせ、12年間を筑波大学で過ごしました。この間大学から得たことを数え上げればきりがありませんが、ここではその中から、私が大学教員という職に就いたということと関係のあるいくつかの思い出を振り返ってみたいと思います。

日本語研究との出会い

なんといっても、私が今この仕事をしているのは、筑波大学の大学、大学院を通じて日本語研究の魅力を教えてもらったからだといっても過言ではないでしょう。

今でも、物語の冒頭の「昔々ある所におじいさんとおばあさんがいました」という文は決して「～おじいさんとおばあさんはいました」にはならない、と授業で教わり「ああそうか」と気づいた時の驚きは、よく覚えています。大学の授業で習った数々の事柄は、それまでの私が初等・中等教育の

中で学んできたものとはまったく異っており、新しい発見の連続でした。

「言語」が「記号」の一種なのだという考え方に触れたり、「しんじゅく」と「しんばし」の「ん」の音が実は違う音声であるということに気づかされたり、日本語にも「活用」があるのだということを教えてもらったりしながら、私は自分が普段何気なく使っていた日本語にいろいろな側面があり、それを母語話者が無意識のうちに使いこなしているのだということを知りました。そしてその現象についてもっと深く学んでいきたいと、強い関心を持つようになったのです。

自分が学生を教える立場となった今では、自分がかつて経験した素朴な驚きを学生達にも味わって欲しい、と願いながら、日々教壇に立っています。

印象に残る授業

言語に関する授業はどれもおもしろいものばかりでしたが、その中で特に印象に残っているのは、1年生の時に受けた文法の授業です。

その授業は、先生が一方的に文法についての講義をするのではなく、先生の指示に従いながら学生が段階的に作業を行いその中でいろいろな規則に気づいていく、という形式のものでした。例えば「書いて」「言って」など動詞の「～て」の形(いわゆる「て形」)を作る規則を勉強する時には、まず「書く」「言う」などいろいろな動詞を「て形」にし、次にその変化の仕方を辞書形の語尾に注目しながら分類していきます。すると、いつの間にか「て形」を作るための規則が浮かび上がってくるのです。

この方法は高校生上がりの当時の私にはとても新鮮でしたし、このようにして日本語の文法を見ていくことは、「次は何だろう」「どうしてこうなるんだろう」「ああそうか」という素朴な疑問と発見に満ちた、とてもおもしろい体験でした。私は所属していた日本語・日本文化学類の授業で文法の他にもいろいろなことを教えてもらいましたが、今の私が文法に関連したテーマを研究対象としているのは、やはりこの授業があったからこそだといえるでしょう。

多彩な授業・恵まれた環境

日语言学類には、音、語彙、文字、文法、談話研究、社会言語学と、言語学の中の多くの分野の授業がそろっていました。当時はそれを当たり前のことと感じていましたが、これだけ多くの分野の授業に講義と演習の両方がそろっていて、しかもそのほとんどを専任の先生から教えてもらえるなんていうぜいたくな大学は、そう多くはありません。自分が大学に勤めるようになった今、そのありがたさがとてもよく分かります。一人の教員として客観的に見れば、何とやらやましい限りです。正直言って私は筑波大学のことをよく調べた上で入学したというわけではなかったのですが、結果的にこのような恵まれた環境の中で勉強できたことは、とても幸運だったと思います。

また、私は日语言学類で、日本語ばかりでなく日本語教育についてもいろいろと教えてもらいました。この分野においても、筑波大学はとても恵まれていました。周知の通り、日语言学類は、日本語教育専攻の学部としては全国でも草分け的な存在です。その名にふさわしく、日语言学類では日本語教育の分野の授業がいくつも開講されていました。そして外国人が多いというキャンパスの性格上、希望すれば外国人留学生のチューターになることができましたし、留学生センターの授業のお手伝いに行くこと

もできました。さらに今では、海外各地の大学に実際に足を運んで実習をさせてもらうこともできると聞いています。大学の授業で学んだことがすぐに実践に移せるという、これだけ恵まれた環境は、滅多にないでしょう。私は今、本務校で日本語教員養成に携わっていますが、自分の教える学生に日本語教育の経験を在学中にいかにつくさん積ませるかということは、我々教員にとって頭の痛い問題です。ですから、教室での勉強と外国人との交流が同時にできるという筑波大学の環境は、とてもうらやましく思いますし、その環境で自分が学べたことはとても貴重だったと感じています。

学類間の垣根の低さ

例えば私の分野に関して言えば、日日学類から一歩出て人文学類に足をのばせば、そこにはさらに多くの言語学の授業が開かれていました。私は日日の授業だけで満足してしまっていたのですが、友人や後輩の中にはいろいろな授業をとってさらに知識を深めている人が何人もいました。私も今思えばもっといろいろなことを勉強しておくべきだった、と少し後悔しています。この学類間の垣根の低さも、筑波大学の魅力だといえるでしょう。

主として日日の授業をとっていた私でも、比較文化学類で開講されていた「現代美学」

という授業は、非常に楽しみでした。ビデオや絵などの視覚資料をいろいろ見ながら、普段は考えもしないような様々なことを哲学的な視点からあらためて考えるのは、とても刺激的でした。授業のノートは今でも私の手元にあります。改めて見直してみると、ずいぶん難しいことを教えてもらっていたのだなあと感じます。この授業の内容を当時の私が本当にきちんと理解できていたかどうかは甚だ疑問なのですが、その時の「考える」という行為は有意義なものだったと思っています。

先生との出会い

筑波大での経験の中で忘れてはならないのが、多くの先生との出会いです。私がこの職に就いたのは、もちろん自分の勉強したことを生かせるからではありますが、在学中に先生方から受けた影響というものは非常に強く残っています。

ああでもない、こうでもないという現象について学生と真剣に議論する先生方の姿は、とても魅力的でした。そしてそれはそのまま、自分もこんな大人になりたいという私の思いにつながっていきました。

また、私は現役での大学院受験に失敗したため1年間研究生をやっていたのですが、その時に当時の指導教官が掛けてくれた「本当に研究を続けていく気があるなら、1

年くらい研究生をやったところで時間のロスでも何でもない」という言葉は、今でもよく覚えています。将来のことを漠然としか考えていなかった当時の私はその言葉を聞いて、これから踏み込んでいこうとする研究というものの大きさを感じ、そしてそこに立ち向かうための姿勢を問われたようで、まさに襟を正す思いでした。

指導教官は私よりも一回りしか年齢が離れていなかったなので、私はその時、「10年後、この先生のように研究と教育に取り組める人間になりたい」と思ったものです。現実はなかなか厳しいものですが、その時の気持ちが今の仕事につながっているのだと思っています。

ここに挙げたのは、筑波大学にまつわる私の思い出の、ごく一部にすぎません。いろんな意味で私を育ててくれた筑波大学に、私は本当に感謝していますし、今も母校とつながりを持ちつつ仕事ができることを、とても嬉しく思います。

かめた ちさと